

新年あけましておめでとうございます。保護者の皆様、地域の皆様はどんなお正月を過ごされたのでしょうか。11、12月は、郊外学習、修学旅行、持久走大会、授業参観、個人懇談、地域消防訓練、祖父江イチョウ祭り、と学校も子供達も、地域も駆け抜けるように過ぎていきました。そんな中でも、ふと目に入るイチョウの黄葉が季節の移ろいを静かに知らせてくれます。忙しさの合間に立ち止まり、同じ景色を見つめる時間が、学校と家庭、地域をゆるやかにつないでくれているように感じます。今号のつなぐだよりも子供たちの学びや地域との関わりを皆様と分かち合いながらお届けします。

▼ 地域消防訓練を通して感じたこと

10月祖父江小学校にて、祖父江校区まちづくり協議会主催の地域消防訓練が行われました。

AEDの説明や消防器具庫の見学、消防車による放水訓練、消火訓練などが行われ、間近で見る消防車に子どもたちの目は輝いていました。祖父江小学校は、災害時には避難所となる場所です。想定人数分の物資が備蓄倉庫に保管されており、訓練は実際の災害を想定して行われました。参加者はAEDの説明などをイメージしながら、真剣に取り組んでいました。

訓練の最後には炊き出しが行われ、温かい豚汁を皆でいただきました。災害時、この一杯がどれほど心の支えになるのか、また、その一杯に至るまでには地域の多くの協力があることを改めて感じました。

年に一度の訓練ですが、毎年違った視点で防災を考える大切な機会となりました。



▼ 5年生 お米教室

12月9日、小学5年生を対象に「お米教室」を行いました。

4月の田植え、10月の稲刈りを経て、今回は一年のまとめとして、実際にお米を炊いて味わう学習です。刈り取った稲が白いお米になるまでの流れを学んだ後、フライパンを使った炊飯に挑戦しました。水加減や火加減に気を配り、子どもたちはフライパンをじっと見つめながら真剣な表情で取り組んでいました。私もフライパン炊飯を教えるという初めての体験でしたが、どの班も焦がすことなく、上手に炊き上げることができました。

「100回噛むと甘くなるよ」という声かけに、一口一口を大切に味わう姿が見られ、「甘い」「おいしい」という声が教室に広がりました。お米の大切さや、食卓に届くまでの多くの手間を、体験を通して学ぶ時間となりました。



(株)松山農産の後藤さん

▼ 3年生の銀杏教室

小学校三年生の教室で、第3回目となる「銀杏教室」を行いました。これまで畑での見学、収穫体験を重ねてきましたが、今回は教室で、収穫後から出荷までの流れをじっくり学ぶ時間です。

動画を通して、銀杏は収穫後、皮をむき、塩水に浸し、乾燥後、検品を経て製品となり出荷されることを伝えました。普段目にするのことがない工程ですが、とても大切な部分です。

今回はJA愛知西の小川さんにもお越しいただき、出荷された銀杏が全国へ届くまでの流れについてお話を伺いました。子どもたちは真剣な表情でノートを取り、学ぶ姿が印象的でした。

稲沢市が銀杏で有名なことは知っていても、「なぜ日本一で高級なのか」という理由まで知る機会は多くありません。4Lや3Lといった大粒の銀杏を目にした瞬間、目をまん丸にして驚く子どもたち。

この学びを通して、銀杏がこの地域の誇りであることが、少しでも心に残ってくれたら嬉しいです。いつか「銀杏の町から来ました」と胸を張って話してくれる日を願っています。



(株)松山農産の後藤さん



J A愛知西の小川さん

お寺でMerryChristmas!

「宗教」という言葉に少し敏感になる時代ですが、最近、近くのお寺で子どもたちのクリスマス会が開かれていました。“お寺でクリスマス”一見不思議に感じますが、その光景はとても温かいものでした。

お寺は本来、地域に一つあり、冠婚葬祭や法事など、命や人生の節目に寄り添ってきた場所です。しかし、現代では墓じまいや簡素なお葬式が増え、関わりは以前より少なくなっています。

そんな中で、学校以外にも、世代や立場、宗教を超えて子どもたちが集える場所があることは、今の地域にとって大きな意味があります。

今回のクリスマス会をきっかけに、住職さん自身が「クリスマスとは何か」を改めて学ばれたと聞きました。互いを知ろうとするその姿勢こそ、多様性の時代に必要なものだと思います。

学び合い、集い合える場所としてのお寺。これは、地域の大切な宝物です。



コラム～インクルーシブな地域を目指して～

—寄り添う、という距離—

「インクルーシブな地域」と聞くと、声をかけること、支援すること、何か行動を起こすことを思い浮かべる人も多いかもしれません。

けれど最近、私は「何もしないこと」や「踏み込まないこと」も、大切な寄り添いの形なのではないかと考えるようになりました。

日々の暮らしの中で、誰もが語らないまま胸の内にしまっている経験があるのだと感じる瞬間があります。言葉にされない部分にこそ、その人が歩んできた時間や、守ってきたものの重さがにじむこともあるのかもしれません。

善意からの支援や活動が、時に「見せること」が目的になってしまう場面もあります。当事者でない人が前に立ち、笑顔で「支援しています」と示すことが、本当に相手の心に届いているのか、立ち止まって考える必要があると感じます。

私自身も、そっと見守ってほしいと感じることがあります。言葉よりも、必要なときに静かに寄り添ってもらえることを望む場面があります。

インクルーシブな地域とは、同じであることを求める場所ではなく、違うまま、隣にいられる関係なのではないでしょうか。

「助ける人」「助けられる人」と分けるのではなく、何かあったときには「助けようね」「助けてね」と言えること。無理のない距離で、互いを気にかけて合えること。

見える優しさよりも、見えにくい配慮が、地域を静かに、確かにつないでいくのだと思います。



家族の経験を通して、インクルーシブという考え方に興味を持ちました。子どもたちの声や感情に寄り添いながら「共に生きる」とは何かを地域全体で考えるきっかけにしたいと、この連載を始めました。

ご意見、ご感想等ございましたら yayoiici@yahoo.co.jp までお寄せください。